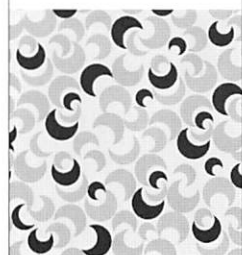


放送・4月10日(日)
再放送・4月12日(火)

日常の歌と時代 暮らしのたのしみ

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama



日常の生活や身辺の人や物や情景をうたう、そういうささやかなことが短歌に関わるよろこびの一つですね。日常からうたう楽しさを中心に、時代や人間や言葉に話を広げたいと思っています。

もともと和歌の世界は日常をうたうものではありませんでした。『万葉集』以降はずっと日常から離れた美や風情の共通世界だったわけです。日常がうたわれるようになったのは明治以降、近代からです。正岡子規が和歌の約束事の世界を打破しようとして、実際の写生ということを言い、身のめぐりのことをうたい始めました。

といつても、子規から全て始まったわけではなく、江戸時代幕末ころには、和歌にもしだいに日常や生活が入って来ていました。その流れの上に子規の大胆な改革の主張と実践があったということですね。

まず一回目は幕末の歌人、橘曙覧の歌から紹介したいと思います。

夕煙ゆふけぶり今日はけふのみたてておけ明日の薪はあす採りてこむ
『橘 曙覧全集』

雪ふりて拾ふ落葉の乏しさに朝げの煙はなぶらたてぞおくるる

こぼれ絲網につくりて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす

一首目は、明日のぶんの薪は無けれどとりあえず夕飯を炊こう、明日の薪はあす採ってこよう、という意味ですね。薪の美しさを「夕煙今日はけふのみたてておけ」と、とても清々しくうたい上げています。明日のことは明日でいい、というわけですね。上と下が対句のようになっていて、おのずと口をつけて出たような自然な調べの良い歌です。

二首目も、雪がふったので落葉が十分に拾えず、朝ごはんを炊くのが遅れてしまったよ、という歌です。驚くほどのシンプルライフですね。そのために一首全体も

簡素で清らかな味わいになっています。

もちろん江戸時代でも、こういう暮らしは特殊でしょう。橘曙覧は越前福井の商家に生まれて家業を継いだのですが、後に譲り渡して、藩からの出仕の要請もことわり、学問と歌の清貧な生活を貫いて、明治維新の年に五十七歳で亡くなりました。

三首目は糸くずを繕ってつくった網に魚を取ろうと、三人の息子たちが日がな一日川にいるよ、という歌。妻子はちゃんといたんですね。「太郎二郎三郎」と順番でなく「二郎太郎三郎」に工夫があります。入れ替えただけで音がいきいきとして楽しげです。自分の息子というより昔話の子供たちのような語りですが、この歌にふ



イラスト：竹嶋浩二

くらみを与えていて普遍性があります。「こぼれ絲網につくりて」も貧しさがむしろ趣きになっています。

橘曙覧でよく知られているのは「たのしみは」で始まる五十二首の「独楽吟」でしょう。

たのしみはまれに魚煮て児等皆がうまいうましといひて食ふ時

たのしみはほしかりし物銭ぶくろうちかたぶけてかひえたるとき

いろいろなたのしみがあるのですが「まれに魚煮て」とか「銭ぶくろうちかたぶけて」というように、乏しいからこそたのしみを豊かに味わっているところが共通しています。清貧を積極的にたのしむ精神ですね。

蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに奔る西へ東へ

曙覧は蟻を見ての連作もつくっていて、この歌などとも面白いですね。現代の歌と言っても通用するのではないかと思えます。「蟻」なんて和歌の伝統には無い卑近な素材でめずらしい歌です。日常用語もどんどんとり入れています。

ところで、初めにあげた一首目の「夕煙」の歌で何となく思い出すのが土屋文明の次の一首です。

にんじんは明日蒔けばよし帰らむよ東一華の花
も閉ざしぬ
土屋文明「山下水」

昭和二十一（一九四六）年、疎開地の群馬で春を迎えたころの歌で、文明は敗戦後に農の生活をみずみずしく歌って短歌の復興を期したのです。この歌は「にんじん」というのが何かいいですね。「東一華」はキンポウゲ科の真っ白な花で一茎に一つ咲くので「一華」の名があります。夕方に閉じるそうです。「にんじん」も「東一華」も明るい感じがして「明日蒔けばよし」の「明日」が開けていくイメージがあります。

大きければいよいよ豊かなる気分東急ハンズの
買物袋
俄 万智「サラダ記念日」

戦後から約四十年後にベストセラーになった「サラダ記念日」はバブル時代の歌集。新しい人気の店「東急ハンズ」を入れて、消費的な生活気分を弾むようにいきいきと屈託なくうたっています。今の沈んだ状況から振り返ると、何かなつかしささえおぼえます。

わたしは別におしゃれではなく写メールで地元を
撮ったりして暮らしてる永井 祐「短歌ヴァーサス」第11号

現代の若い人の歌です。意味としては、「おしゃれではなく」というのは、趣味で優雅にやっつるわけじゃない

く、くらのニューアンスです。写メール（ケイタイの写真）で、地元そのへんを撮ったりして暮らしている、ということ。用語や言い回しが今ふうなので、わかりにくいかもしれません。「地元」という言葉を若い人はよく使います。今の若い人は旅行とか車とか金のかかることは出来ない。また、そういう欲望を持たず地元でささやかに楽しんでいるのです。

橘曙覧とは生活様式は違っても、上昇志向でない、暮らしのたのしみを見出すところに、共通のものが芽生え始めているようにも思います。



選者の一首

花山多佳子

夕映えはとおくに兆し水たまるふちに桜花
のこびりつきたり

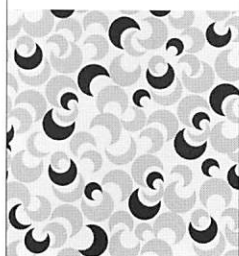
「樹の下の椅子」

第一歌集の一首目の歌をあげてみた。若いころ一時期、桜に夢中になったことがある。実家から坂をくだると井の頭公園だったので、よく見に行った。この「水」は池ではなく水たまりである。最近桜もあまり見に行かない。団地の桜で済ませてしまっ。

放送・5月8日(日)
再放送・5月10日(火)

日常の歌と時代 ガラス戸

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama



正岡子規が病臥する根岸の家にガラス戸が入ったのは明治三十二(一八九九)年十二月のことでした。一般的にも早いほうだったようです。それは動けない子規の生活を一変させるほどの画期的なことでした。居ながらにして外の景色が見えることは、写生する氣を大いに促したにちがいありません。明治期にこんなガラス戸を歌った人はいないでしょう。日常生活の新しい素材をさっと歌に摂取できるのは、子規が和歌だけでなく、先に俳句の世界になじんでいたということも一つあると思われまます。

鏡なすガラス張窓影透きて上野の森に雪つもる
見ゆ

正岡子規『竹の里歌』

窓の外の蟲さへ見ゆるビードロのガラスの板は
神業なるべし

同

こういう歌はガラス讚歌ですね。「ガラス」と言っただけで透明なのは十分わかるのに「鏡なすガラス張

窓影透きて」なんて強調したり、ビードロとガラスは同じなのに重ねて言って「神業」とまで称えています。「蟲さへ見ゆる」も驚きが実に率直です。

冬ごもる病の床のガラス戸の曇りぬぐへば足袋
干せる見ゆ

朝な夕なガラス戸の外に紙鳶見えて此頃風の東
吹くなり

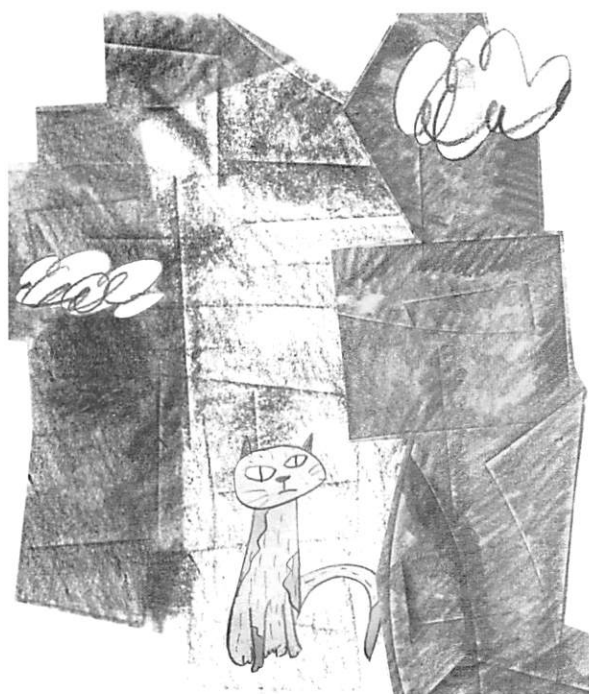
ガラス戸の外の月夜をながむれどランプの影の
うつりて見えす

せつかくのガラスが入ったのに冬枯れの季節で好きな草花もないのですね。でも、そのためにかえって、ありのままが味わいになっていくようです。一首目、病の床から手を伸べて曇りをぬぐったら足袋が干したのが見えただけ。ガラス戸のその範囲、その視野だけが世界であった、ということが伝わってきます。

二首目は同じ冬でも視界が開けています。冬は毎日、

紙鳶たこが上がっているんですね。今は紙鳶を上げる子供はほんとに少なくなりました。紙鳶の動きを毎日見ている、このごろは東の風が吹いている、もう春なんだなあ、と思っている。紙鳶の風の方で春を感じるといのは、和歌の季節感には無かったもので新鮮です。これも、閉ざされている人だからこそ、観察してキャッチできた季節の推移でしょう。

三首目は、月を見ようと思うのにガラスにランプの影が映って見えない、という歌。子規はこの現象を興味深く思ったのでしょうね。ランプが時代を感じさせます。ランプの時代は短く、その後電気に切り替わってゆきます。ガラスにランプの影、はこの一首だけが



イラスト：竹嶋浩二

残した日常の情景といえるかもしれません。

鋪道はたらには何も通らぬひとときが折々ありぬ硝子戸がらのそと
佐藤佐太郎『歩道』

硝子戸のそと見つつをり風ふきて鋪道に低く埃ほこりなびかふ
同

昭和十五（一九四〇）年に出た『歩道』も「硝子戸」の多く登場する歌集です。すでに日常に溶け込んでいますが、硝子戸という透明な隔たりの内と外、が佐太郎に常に意識されているようです。部屋が路地の鋪道に面しているという都会の住居ゆえのモチーフともいえます。庭を眺めるのとは違って硝子を隔てた外界なのです。

一首目は佐太郎の代表歌にもなっている歌です。ふつうは何か通ったものを歌うのに「何も通らぬ」ことを歌っているのが独特です。折々、そういう時がある、という空白の或る感じをとらえています。

二首目は見えるといっても、これまた「低く埃なびかふ」と、ごくつまらないものが見えていて、それが鋪道の或る空気を伝えてきます。「鋪道」も都市の新しい用語でした。どちらも、じっと一日ながめているかのような時間が感じられ、何も起こらない。その外界が、見ている作者の内面のように思われてきます。

一首目が昭和十一（一九三六）年、二首目が十五年

につくられた歌で、戦争に向かってなだれてゆく時代でした。この何事も起こらない日常の描き方が妙に印象的です。

四枚の大ガラス戸を透る陽のあまねき部屋に我がわれを飼ふ
森山晴美「わが毒」

昭和三十年代の若い女性の歌です。これはガラス戸の外に見えるのではなく、中の自分を歌っています。「四枚の大ガラス戸」はいかにも戦後の住宅です。昔の家のような陰も暗さもなく陽にさらされている部屋。そこで人に飼われているのではなく「我がわれを飼ふ」という自意識と、その苦しさが打ち出されて迫るものがあります。

兩戸開け硝子戸をあけ仏壇の扉をあけて吾子に雪景色
小林幸子「あまあづみ」

これは現代の歌ですが「兩戸」も登場してきます。今でも兩戸の内側にガラス戸があるという家はいくらでもあります。わが家は団地なので兩戸はないのですが、実家はこの通りでした。実際に開ける順序としては「硝子戸を開け兩戸を開け」ですが、調子でこうなっているわけで、両方を開けたということだと思います。順に同じように「仏壇の扉をあけて」というのですね。そして吾子に雪景色を見せるのです。

「開け」が三回繰り返し返されて、その動作が時間をかけた儀式のようにゆったりと流れていきます。そして「吾子に雪景色」と省略されてほんと置かれた結句が明るさをとすようです。

ガラス戸、硝子戸と表記はそれぞれで「玻璃戸」というのもあります。

選者の一首

花山多佳子

ベランダの硝子の前に来て坐る猫あり死後のわれのごとしも

「空白」

ベランダに来た猫が硝子戸の前に肢をそろえてきちんと坐って、部屋の中を見ている。鳴くでもなくじいっと。こちらが見ても何の反応もない。ふと変な気がした。死後の自分が訪れてきたような。いろいろな猫がベランダに来たが、この猫以外はただのノラちゃんだった。

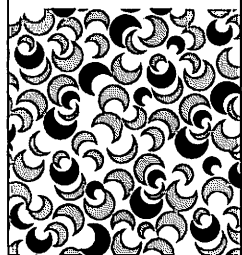
放送・8月14日(日)

再放送・8月16日(火)

日常の歌と時代

眠り

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
 Takako Hanayama



という事情が感じられて、かなしい歌です。

この歌は明治四十四(一九一二年)の一月ごろつくられたようです。このころから体調に不安を覚えていた啄木は二月に結核の診断を受けて入院しました。翌年の四月に二十六歳で亡くなりました。

「明日はよき事」はやはりなかったのです。でも「よき事あるごとく」思う若さが胸に沁みてきます。事情がわからなくとも、自分にもこの気持わかる、という感じがするのではないのでしょうか。啄木にはそういう普遍性があります。

二首目、眠れない日々になちよつとでも眠いときがあれば「うろたへて寝る」。これもとてもよくわかります。何でもない心理をごく平明な言葉でキャッチする、これは啄木の開拓したことでした。明治の短歌ではたいへんに新しかったといえます。口語も自然ですし、三行書き、句読点、記号「!」の使用も斬新です。

人間は一日のうち三分の一か、少ない人でも四分の一くらいは眠っているわけですから、日常に占める割合は大きいですね。よく眠れたかどうかで、その日の気分もずいぶん違います。心と眠りは密接な関係があると思います。また人は眠る前にいろいろなことを思ったり考えたりするものです。

何となく明日はよき事あるごとく

思ふ心を

叱りて眠る。

石川啄木「悲しき玩具」

眠られぬ癖のかなしさよ!

すこしでも

眠気がさせば、うろたへて寝る

同

一首目、何となく明日いいことがありそうに思う、ということには誰にもあつて、ふつうはそのまま安らかに眠ります。ところが、そう思う心を「叱りて眠る」というのです。いいことなど、あると思つてはいけな

垂乳根の母が釣りたる青蚊帳をすがしといねつ
たるみたれども
長塚 節『長塚節歌集』

小さな蚊帳こそよけれしめやかに雨を聴きつ
つやがて眠らむ
同

大正三(一九一四)年の歌です。長塚節もこのころ結核で入院していましたが、気が紛れないので雨をおして帰郷したと、歌の前に記しています。生家は茨城県の大きな旧家で今もあります。久しぶりにお母さんに蚊帳を吊ってもらって寝たのですね。すがすがしく寝た、と言ってから「たるみたれども」と付け加えたのが面白い。たるんではいるけれど、というところにも母が



イラスト：竹嶋浩二

吊ってくれた喜びが滲んでいるようです。

二首目の「こそ・よけれ」は係り結びです。小さい蚊帳はいい、しめやかに雨を聴きながら間もなく眠るだろう、という歌。一人用の蚊帳でしょうか、繭のように包まれて雨音をききながら眠る安堵感がしみじみと伝わってきます。長塚節の歌には蚊帳がよく登場します。節に限らず近代の歌には蚊帳がよく目につきます。夏といえば蚊帳。なつかしい限りです。

アンデルセンのその薄ら氷に似し童話抱きつつ
ひと夜ねむりに落ちむとす
葛原妙子『橙黄』

読んでいたものを思いながら眠りに落ちるといふことはよくあります。これは子どもに読んでやったのかもしれない。薄ら氷に似たアンデルセンの童話って何だろう、と想像を誘われます。『雪の女王』か、短篇かしら、と。「薄ら氷」という比喩は変わっていますが、繊細ですぐ割れそうな、というイメージでしょうか。「抱きつつ」には、それを胸に大事にして眠る思いがあります。「ねむりに落ちむとす」のもたつた言い方が、眠りまでの状態を感じさせます。長塚節の「やがて眠らむ」と同じことなのに、安らかな感じはしません。

この歌は昭和十九(一九四四)年、三児を連れて浅間山麓に疎開していたところにつくられたものです。終戦近い疎開先での歌と知って読むと、より印象的です。む

ろん歌は一首で味わっていいわけですが、背景がわかったほうがいい歌というのもあります。ついでに言うところの歌はかなり字余りで長いですね。戦後にかけて、こういう字余りの破調、調べのなめらかでない歌が全体に多くなります。これも時代の傾向といえるでしょう。

じゅつと燃える線香花火の火の玉の落ちる速度で眠りましたよ 東直子「春原さんのリコーダー」

これは眠りに落ちる速度だけを歌っています。線香花火はパチパチ弾けて終わりに「じゅつと燃える」感じですから、ほんとと火の玉が落ちます。これは速いですね。眠りもそんなふうには、いきなり落ちたのです。この比喩はうまいなあと思いました。「速度」にかかる比喩がとても長いですね。線香花火のように燃え尽きるまでの時間の推移も含む流れになっています。

「春原さんのリコーダー」は一九九六年に出た歌集です。「眠りましたよ」といったやわらかい話しかけるような口調が特徴的で、口語の新人が続々と出た時代でした。蛾になつて昼間の壁に眠りたい 長い刃物のような一日 笹井宏之「ひとさらい」

「長い刃物のような一日」は一日が長い刃物のようでその上をわたるような辛さだ、ということでしょう。蛾はよく昼の壁にびったりと羽をひろげて止まっています。

ます。「刃物」をよけて平たい壁にはりついて眠りたい。この比喩はとても切実感があります。蛾になつて眠りたい、でなく「昼間の壁に眠りたい」としているために、説得力があるのでしょうか。

笹井宏之は一昨年、二十六歳で急逝しました。辛い病気で願望の歌ですが、この歌は病気ということではなくとも共感できるのではないのでしょうか。

今回は自分の自分の眠りの歌に絞ってみました。子どもや動物の眠り、他人の眠り、また山や樹木の眠りなども興味深いテーマです。



選者の一首

花山多佳子

「次は日没、日没です」と聞こえはいつく
の駅か再び眠る

花山多佳子「木香薔薇」

私は家でもよく眠りますが電車でもよく眠ります。駅名のアナウンスが「日没」と聞こえたなんて嘘のような、ほんとの話です。時間を旅してるとような不思議な心持で、また眠りこんでいました。

放送・9月11日(日)

再放送・9月13日(火)

日常の歌と時代 会話

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama



短歌の中に誰かが言ったこと、台詞せりふを入れることはよくあります。幼い子が言ったことをそのまま歌にするだけで面白い歌もあるし、ふと街で聞いたつぶやき、また心に残る父母の言葉もあります。自分の心の声を台詞にする、という方法もあるでしょう。台詞が入ると歌の場がいきいきと伝わることもあって、現代ではかなり好まれ、あふれているといつてもいいかもしれません。

でも、現代までは、台詞を入れた歌というのはそれほど一般的ではありませんでした。どうしても散文的になるので、短歌の形式には、なじむのが難しかったといえます。

折りてよと花さく椿ゆびさしてわれを呼ぶ子は
誰が子なるらむ

落合直文『秋之家歌集』

父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば
死なれざりけり

同

父と母といづれがよきと子に問へば父よといひ
て母をかへりみぬ

同

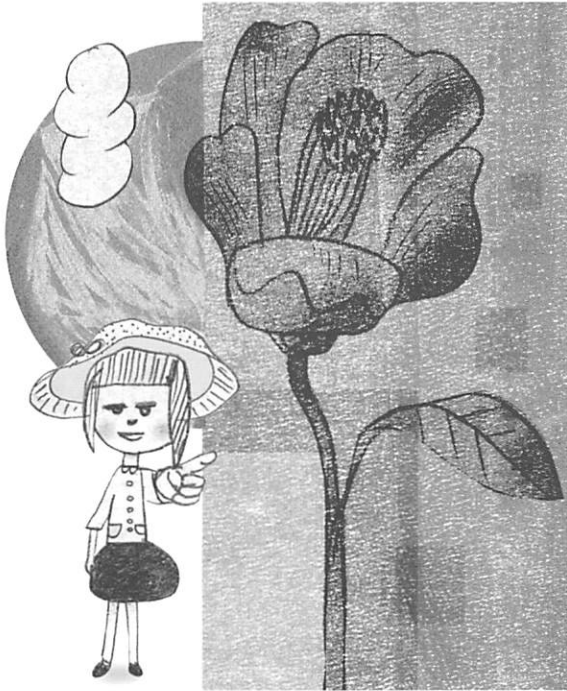
明治三十二(一八九九)年ころの歌です。会話を入れた歌としては最もはやい例かもしれませんが。歌の調べを損なわずに台詞を取り入れる原理がここにありま
す。いずれも「と」でつないで「ゆびさして」「手をつきて」「子に問へば」と受けるシンプルなかたちです。

一首目は、あれ、折つてよ、と女の子でしょうか、椿の花を指差して言っている。どこの子かしら、という歌です。よそのおじさんに、こんなことねだる子もいたんですね。情景が実にほのぼのとしています。

二首目は「父君よ今朝はいかに」は、実際の言葉かどうかはわかりません。「手をつきて」ですから案外そのままの台詞かもしれません。病床の父への礼節、現代では考えられない場面で、こうだったのか、と思ってしまうました。この健気さを見ては確かに死なれません。

三首目はおもしろい。この時代にもお父さんが子に「お父さんとお母さんのどっちがいい？」なんて訊いてるんですね。すると子はしかたなくて「おとうさんよ」と答えるのですが、そのときお母さんを振りかえって見るのです。この、子ども心をさっとキャッチして歌にするなんて、明治の家父長として、ずいぶん細やかで、家庭的だなあと思います。

落合直文は宮城県気仙沼出身の国文学者、歌人で詩や唱歌でも有名です。かの「青葉しげれる櫻井の」の「楠公の歌」や「孝女白菊の歌」の作者でもあります。武士道的なイメージが強いのですが、子どもの歌など実にあたたかく繊細です。



イラスト：竹嶋浩二

「何の用だ」「酒の伝票」「誰だ名は」「高橋茂吉」
「よし少こ待で」
宮澤賢治「歌稿」より

これはまた掛け合いの台詞だけで出来ている珍しい歌。「」を使うのも例外的。もとは台詞ごとの五行書きです。何だかわからないのですが楽しく、舞台の一場面のようで、東北弁ゆえの味があります。短歌としてはちょっとないユニークなものなので紹介しておきます。これは大正五（一九一六）年につくられた歌です。宮澤賢治は「和歌」と称して歌をたくさんつくっていましたが、どこが和歌かと思う歌ばかり。一行書きから五行書きまで自由自在で発想も詩に近いものです。

あなたは勝つものとおもつてゐましたかと老いたる妻のさびしげにいふ
土岐善磨「夏草」

昭和二十一（一九四六）年の歌。土岐善磨は友達の石川啄木より一歳年上で、敗戦のときは六十歳でした。「老いたる妻」っていうほどかなあ、と思ってしまうのですが、それはともかく、この戦争、あなたは勝つものと思つていましたか、と訊くんですね。どうだったのだろう、と突きつけられる思い。妻の台詞の内容だけで力を持つ歌といえるでしょう。この戦争は何だったのか、という言い表せない索漠たるものが、妻の言葉を通して伝わってきます。

「俺は別にいいよ」って何がいいんだかわからな
いままうなずいている 俵 万智「サラタ記念日」

会話体それも「」がふつうに使われるようになったのは、やはり「サラタ記念日」の登場が大きいでしょう。短歌というよりはトレンドイ小説の一行のよう。「と」でなく「つて」で受けて、そのまま「何がいいんだか」という、ふだん通りの軽やかさは従来の短歌にはないものでした。ベストセラーになったのは昭和六十二（一九八七）年、昭和も終わりに近づいています。

掃除機は仰向けのままひかれをり「ずぼらやな
あ」と叱られながら 池田はるみ「南無 晩ごはん」

去年出た歌集から。掃除機が叱られている台詞のかたちにしたのが楽しいですね。「ずぼらだと叱られながら」では面白くないし「ずぼらねえ」とかでも駄目でしょう。「ずぼらやなあ」という関西弁だから味がある、ここがふしぎです。掃除機はなんとなく生き物っぽくて、ごろんと仰向けになってしまったり、カーテンに食いついたりします。仰向けのまま引かれているのは、仰向けのまま引いている人がいるせいなので、ずぼらなのは、もちろん作者です。この言い草のおかしさは、さまざまなことに通じるおかしさですね。

天然の冷蔵庫だなを聞きたくて父と市バスにゆ
られとります 斉藤斎藤「渡辺のわたし」

平成十六（二〇〇四）年に出た若手の歌集から。「天然の冷蔵庫だな」というのがバスに乗ったときの父の口ぐせなんですね。それにしても「天然」とはまた妙に古くさいですね。しかもバスは「天然」でもない、ずれたおかしさ。「ゆられとります」もそうですが、何か庶民的な懐かしさを醸かしています。

短歌に話し言葉を入れるかたちというのは、時代を直接に反映して面白いです。



選者の一首

花山多佳子

「ココアでも飲む？」といふ声聞こえてきて夜
を明かすらし姉と弟

「春疾風」

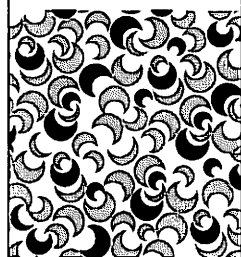
二人の子どもが高校生くらいでしょうか。私はもう床の中ですが、会話が聞こえてきます。それぞれに夜を過ごしながら、一緒にココアを飲むらしい。ふだんは喧嘩ばかりなのに、と、聞いている安らぎ。こういう時期も遠くなって、読み返すとなつかしい一首です。

放送・1月15日(日)

再放送・1月17日(火)

日常の歌と時代 正月

はなやまた
Takako Hanayama
花山多佳子「塔」選者



な中で迎えた新年の思いが「正月といはぬ」と絞り出されたような声調にこもります。

戦争を背景として読まなくとも、さまざまな状況で共感され得る心境の歌でしょう。

磨かれし硝子を占めて闇黒し孤り正月の宿直をする
田谷 鋭「波濤遠望集」

正月にひとり宿直をしている人もいます。田谷鋭は旧国鉄に勤務していました。年末に宿直室の硝子もよく磨かれたのでしょう。磨かれた硝子を占めている闇が黒い。この表現に孤独感が滲みます。正月の晴れがましきとは無縁の闇にひっそりと向かい合っている夜。でもこの孤独には、これが自分の居場所だという親しみもあるような気がします。日本が高度成長期に入った昭和三十年代前半の歌ですが、時代の高揚の裏側のような静けさがあります。

今年の正月は、例年のように我が家で迎えられない人も多く、辛い思いをされている方がたくさんいらっしゃるかと思います。去年のお正月はまだ何事も起こっていないかったです。震災後、はじめての正月は日本にとって記憶に刻まれることになるに違いありません。そういう思いも重ねて、まずこの歌を紹介したいと思います。

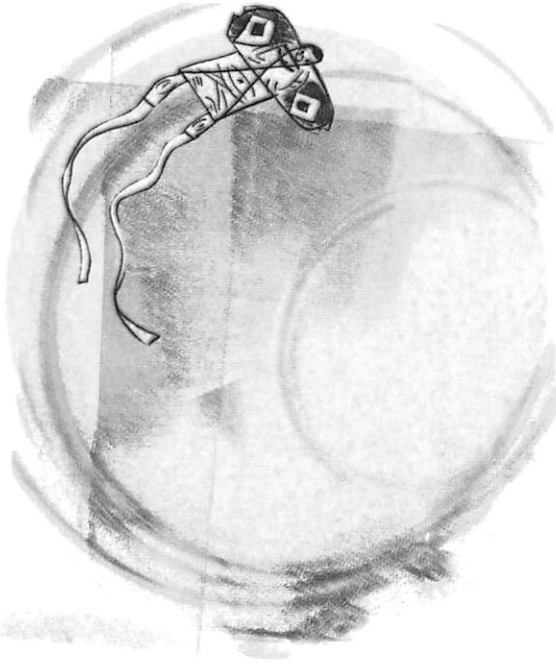
昨日なく明日は思へず今日の日
心の凝れば正月といはぬ
窪田空穂「冬木原」

昭和二十(一九四五)年「声なき年頭」と記す一首。「昨日なく」は、昨日在ったものはもうなく、ということでしょう。明日のことは考えられず、今日のことだけに心は凝り固まっているので、正月とはいわない、という歌です。正月どころじゃない、という心境ですね。その前には「焼夷弾間ちかくも落ち街路樹の銀杏の染みの極まりにける」など空襲の歌が続いています。そんな

元日のなにするとなき心どに天眼鏡を拭ひてゐたり
上田三四二『湧井』

元日に何をするともなくして天眼鏡を拭いていました、という歌。「心ど」は気力、しっかりした心のありか、という意味なので「なにするとなき心ど」は、気力の湧かない心持ちなのでしょう。元日早々に前向きでない感じですが、この気分とてもよくわかります。

子供も大きくなっていて、老いに入ったころ、初詣の人込みに行く気力もなく、年始の客もないと、どうも所在ない。かといって、日常的に過ごす気分でもない。元日なんだ、という意識があるだけに、どうも冴えな



イラスト：竹嶋浩二

い感じ。なんとなく「天眼鏡を拭ひてゐたり」が、そんな気分をよく出していてリアルです。

正月の歌というと年頭の抱負になりがちですが、こういう、ぱっとしない実感を詠むというのも、味があって、いいのではないのでしょうか。

これは昭和四十八（一九七三）年作の歌です。

つく羽根の音冴えてゐし正月はとんとむかしの
ことなりしかな
藤井常世『九十九夜』

お正月に羽根つきをしていたのはいつ頃まででしょう。私も家の前の路地でよくやりました。垣根の中にすぐ飛び込んでしまつて、捜しあぐねたものです。「音冴えてゐし正月」と言われると、カーンという音とともに、晴れて澄んだ空気が広がるような気がします。

そして「とんとむかし」がいいですね。実際には、そう大昔のことではないのに、そんな心持ちがしてしまふ、という感じ。時代がほんとに速く移り変わってしまったことが、つくづくと思われる「とんとむかし」です。「ことなりしかな」という、のんびりした結句も現代の歌としてめずらしい。一首全体の古風なシンプルさが、羽根つきそのもののように、なつかしく感じられるのです。

平成に入ってから歌集で、昭和がとんとむかしになつていくころの歌です。

雑煮にと給ひし田芹すぐやかな茎に染みをり
 去年の茜の

春日真木子「風の柱」

近年の歌集からあげてみます。こまやかな正月の風情ある歌ですね。「田芹」は単に芹のことでもあるのですが、どこかで摘んできてくださったものでしょう。売っている芹と違って、みずみずしい茎に赤みがさしている。くださったのは晦日か元日かわかりませんが、「茎に染みをり去年の茜の」というのが、とても美しい表現です。土に伸びている茎が茜色に染まったのは去年なのです。その去年の色を、年明けた今見ている。去年と今年というのは、人のつくった区切りですが、その区切りゆえの「去年の茜」のなつかしさが心をも染めています。

悲しむべきことなきこととき冬晴れよ風と地上の
 人は引きあふ

横山未来子「花の線画」

この歌はお正月とはかぎりませんが、おだやかな冬晴れは正月に多くて、ほんとに「悲しむべきことなきこととき」という思いになります。この世のどこに悲苦があるんだらうと。空高く揚がった風と、地上の人が一本の糸で引き合っているのは、かぎりなくシンプルな情景で「悲しむべきことなき」を強めています。でも同時に「地上の人」であることも、まざまざと感じさせるので

す。風を揚げている、でなく「引きあふ」という表現には身体があるんですね。人は身体を離れられず、そこに悲しみも苦しみも宿ります。

こういうことを歌は解説していませんが、情景では語っているように思うのです。

正月の遊びや風習はだんだん乏しくなってきた、それとともに正月の歌も減ってきているように思われます。正月らしからぬ正月の何もしなかつた歌、さびしい正月の歌など、毎年つくつてみてはいかががでしょう。事柄のないほうが、かえって味が出る場合があります。



選者の一首

花山多佳子

指編みをしてる娘、わたくしは『一点鐘』
 を読みて年越す

「木香薔薇」

『一点鐘』は当時出版された岡部桂一郎の歌集です。読んでいたのは事実ですが、このタイトルと、年越しがマッチすると思って歌にしました。「指編み」は指だけで毛糸を編みます。時間を紡ぐようで、年越しらしい気がしました。

放送・2月12日(日)

再放送・2月14日(火)

日常の歌と時代
冬の鳥

「と霧消ゆる湊江の 舟に白し、朝の霜。ただ水鳥の 声はして いまだ覚めず、岸の家」、この「冬景色」という唱歌が大好きです。誰の作詞かわからないようですが、いい歌詞ですね。いかにも寒い入江の情景がくつきりとして、「ただ水鳥の 声はして」に、いっその静けさが伝わってきます。

海暮れて鴨のこゑほのかに白し

芭蕉「野ざらし紀行」

これも冬の鴨^{かも}の 声。鴨の 声を「白し」と色で表現したのが芭蕉ならではの言われている、有名な句です。「白し」は沁み通るような声ということでしょうか。鴨の 声というとグワァグワァと濁って聞こえるので、「ほのかに白し」とは、と驚きます。

冬は視界に目立ったものがなく、気が散らないせいか、心が落ち着いて声にしんと耳を澄ます季節ではないでしょうか。

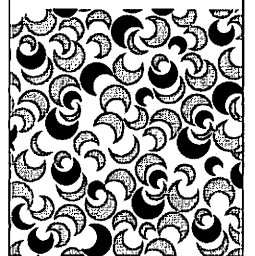
はなやまたか
Takako Hanayama
花山多佳子「塔」選者

真冬啼くひたきみそさざいづれみな人里にな
きて声の錆びたる

若山牧水「黒松」

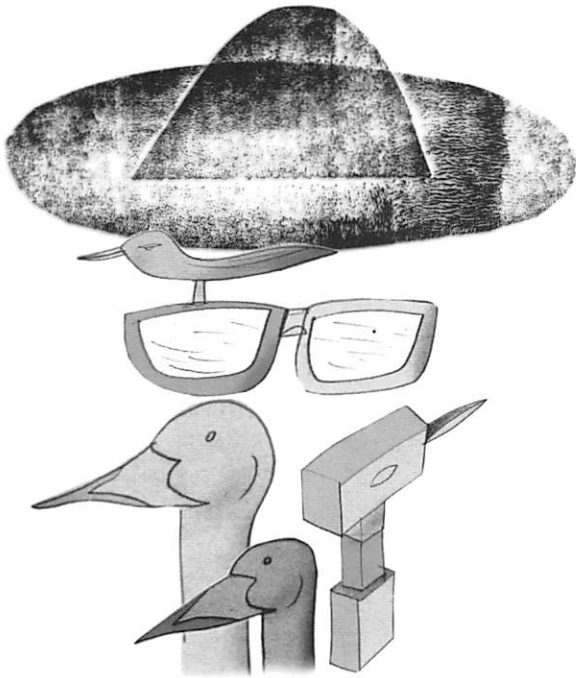
牧水には鳥の歌が多いですが、「黒松」という歌集はことに鳥オンパレードという感があります。冬はその 声を実にこまやかに聞いています。「いづれみな人里になきて」には、真冬は山から人里に下りて啼いて いることよ、という愛しさがこもっているようです。

「声の錆びたる」はふつう「寂びたる」というところまで「錆」の字を当てているのは変わっています。枯れた、ちよつと乾いた声なのでしょう。やはり声に「錆」という視覚的な表現をしているんですね。ひたきも、みそさざいも、ほんとに小さい鳥なのに、真冬にこんなにかたまりて声か錆びちやつたよ、と切なく聞く 牧水がいます。昭和二（一九二七）年につくられた歌ですが、翌年の昭和三年に牧水は四十四歳で亡くなりました。



白鳥のねむれる沼を抱きながら夜もすがら濃く
なりゆくウラン
岡井 隆『ウランと白鳥』
ひるすぎの光によごとぶ白のとばざる白にま
してかなしき
同

一転して現代。一首目は歌集冒頭の連作の「ウラン
と白鳥」のタイトルの下に付された歌です。この連作
は平成十五（二〇〇三）年に青森県六ヶ所村原子燃料
サイクル施設視察に訪れての制作で、その間、沼に來
ていた白鳥も見たようです。人智を超えてしまう魔神
のごとき原子力と、ヤマトタケル伝説の白鳥。科学と
自然。とても思索的な連作で、この一首も抽象度は高



イラスト：竹嶋浩二

いのですが、現実の風景としても十分読めます。白鳥
が渡ってくる美しい沼があるようなところに原発は建
っているわけです。「抱きながら夜もすがら濃くなり
ゆく」というような表現が美しいだけに戦慄的せんりつです。

歌集『ウランと白鳥』は、巻末にまた「白鳥の午後」
という新潟に行って白鳥を見ての連作があつて、二首
目はその最後の歌です。「光によごと」という表現が
特殊ですね。光も、白をよごとしているのです。そして、
よごとながらとぶ白が、とばない白よりかなしい、と
いうところに自身の生への思いが重ねられているよう
です。

水草の根を掘りいたる白鳥が泥まみれなる顔を
上げたり
渡辺松男『泡宇宙の蛙』

白鳥の鳴くときすこし湯気が立つ今二羽が鳴き
ふたすじの湯気
同

こちらは生々しい動物としての白鳥。一首目は水草
の根を掘っていて、泥まみれの顔を上げたという、何
とも生身の白鳥です。大きいだけに、猛々しさが目立
つんですね。美しいイメージを壊して、切実な生命の
迫力を感じさせます。

二首目、鳴くときに立つ湯気を見てとっているのが
すごい。で「二羽が鳴きふたすじの湯気」は当然でま
さに写生なのですが、二羽になって、あたたかく愛し

いものが立ちのぼるような感じが伝わってきます。「かすかに湯気が立つ」でなく「すこし湯気が立つ」の「すこし」が断然いい。ちょっとした言葉の選びで、実感に添う歌になっています。

『泡宇宙の蛙』（平成十一年刊）の「白鳥」の連作は、いずれも白鳥の存在感が圧倒的な十首です。

雪雲の切れて動く見えながら近づきて来る白鳥の群れ
安部洋子「鳥の声」


「雪雲の切れて動く」と見えたのは、近づくと白鳥の群れなのです。或るところから白鳥だと気づく。そのおぼろな境界を「見えながら近づきて来る」と、自然につながっているのが巧みです。空と鳥の群れが一つになっていて、それが分かれてくる。時間の流れのゆるやかに感じられる歌です。

作者は松江在住で、鳥と親しい日常を過ごしています。「雪雲の切れて」に日本海側の冬のうつつとうしさがあり、「切れて」に変化への期待があるような気がします。それは「白鳥」だった。近づく白鳥はやはり空から訪れる恩寵でもあると思うのです。

雪はれし木立あかるくこまやかに声散らす鳥のあれども見えぬ
柏崎駿二「百たびの雪」

盛岡在住の作者で、白鳥のいい歌も多いのですが、

白鳥ばかりになるので、この歌をご紹介します。冬の簡潔なあかるさに充ちていて「こまやかに声散らす」という表現が、牧水の歌とはまた違った晴れやかさがあります。木立は葉を落として籠る蔭もないのに、声だけで鳥の姿は見えない。ちょっとしたふしぎな気がしているのでしょうか。雪の晴れたまぶしさど、散る鳥の声。この世ならぬ空間に、読者も誘い込まれます。冬の鳥の歌には地方色が豊かで、知らない土地のことに触れることができます。そこに住む人の心も鳥にたくざれているようです。



選者の一首

花山多佳子

田の水の浅きに寄りて一方へ蔭のやうなり
白鳥の首

「木香薔薇」

関東平野の、どこまでも冬田の中の白鳥の飛来地。風がさえぎるものもなく吹き、すこく寒い。田の浅い水のあたりに白鳥の群れは、同じ向きにかたまっていました。遠目にはその首が蔭のように、か細く見えたのです。

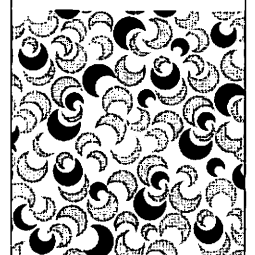
放送・3月11日(日)

再放送・3月13日(火)

日常の歌と時代

兄弟姉妹

はなやまたかこ
 花山多佳子「塔」選者
 Takako Hanayama



親と子、夫と妻、短歌にはもつともよく歌われる関係です。それに較べると兄弟姉妹はやや距離があつて、そう多くはなさそうに見えます。でも、ともに育つた兄弟姉妹というのは、お互いの人格に影響し合っているでしょうし、記憶も共有していて、心に残る歌がありますね。私は一人っ子で育つたので、そういう横のつながりがうらやましく思います。

山なかにくすしいとなみある兄はゴムの長靴を
 幾つも持てり
 斎藤茂吉「石泉」

「くすし」は「薬師」で医者のことです。山中で医者をやっている兄はゴムの長靴を幾つも持っている。それだけなのですが、茂吉が目留めて、山中での兄の往診のさまを並みだいでいいではないなあ、と深く思ったことがよくわかります。

この歌は、昭和七(一九三二)年、北海道志文内で村医をやっている次兄を訪ねた折のものです。弟もいっし

よに行つて、兄弟の団欒と北海道の自然がこもごもに描かれていく一連です。茂吉は十四歳のとき上京して、精神科病院の養子になっています。次兄も長男ではないので、北海道に渡つたのでしよう。人生の大きな隔たり、歳月の隔たりを経た兄弟、それでも濃く情愛が滲むのは、近代だなあという気がします。

円柱は何れも太く妹をしばしばわれの視野から奪ふ
 大西民子「雲の地図」

旅行先の寺でしょうか。「円柱」というとローマとかのイメージですが日本の寺かもしれません。妹の姿が円柱にさえぎられて見えなくなる、というだけのことですが「われの視野から奪ふ」が、何か不吉なものを感じさせます。夢の情景のようでもありますね。

『雲の地図』では後にこの妹が亡くなる歌が出てきますから、その予兆のような歌としてこの歌は有名になっています。大西民子にとって妹は唯一残った血縁でし

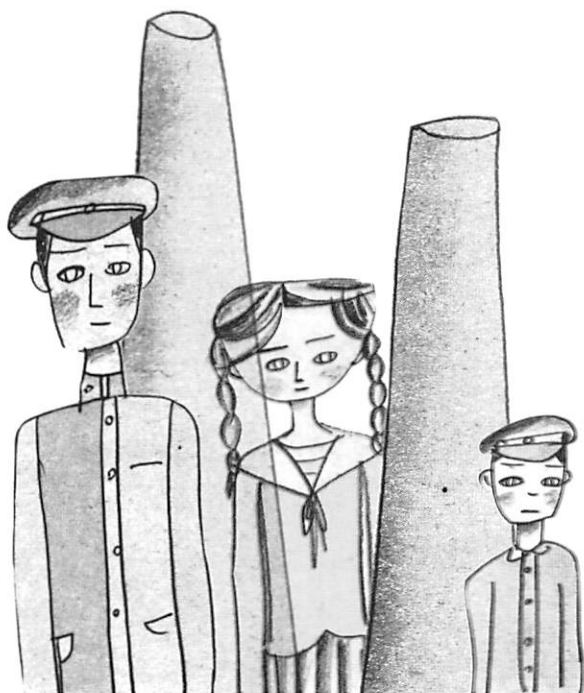
た。ふたりで一緒に住んでいて、妹は病弱で繊細でお姉さんに頼りきっていたようです。予兆というより、ただ一人の妹を失うことを怖れる気持ちがいつもあって、こういう歌になったといえるのでしょうか。直接に不安を言うよりも、暗示的に読めるわけですね。

また状況を知らなくても誰しも、ふと無意識の怖れに気づかされる歌です。『雲の地図』は昭和五十(一九七五)年刊、作者四十代後半の歌です。

かつてわれを軍靴に蹴りし父なりと兄は静かにひと息に告ぐ

秋山佐和子『晩夏の記』

妹の知らない戦時中の父の姿を兄が告げています。



イラスト：竹嶋浩二

若さを過ぎた戦後の父しか知らない下の子にとっては、イメージできない父かもしれません。どういう折か兄は妹に告げたい衝動にかられた、その感じが「静かにひと息に告ぐ」でしょうね。父の或る面を告げたい欲求がリアルに出ています。ただ蹴ったのでなく「軍靴に」であるところが生々しい。

初めに兄弟姉妹は記憶を共有する、と書きましたが、共有しないことも、しばしばモチーフになります。父の像も兄弟姉妹の間で異なるものなのでしょう。

作者は私と同じ戦後生まれの団塊世代です。

「弟よ」息子のわれを母は呼ぶ、よし、弟の在るは忘れず

柳 宣宏『施無畏』

最近の歌集から。母は認知症で、息子のわれを弟だと思っているようです。息子の自分が忘れられたのは情けないはずですが、それよりも「よし、弟の在るは忘れず」と、どこかに記憶を残していることを良しとする気持ち健やかです。それが「弟」というのが何かりアルですね。最後まで記憶に残るのはもしかすると弟なのかもしれない、と思わせられます。つまりそれは姉であった子供の自分の記憶なのでしょう。

一首の中で、母子の間に弟という存在が入ってきて、人間関係が緩むというか、横に味わいが広がっているように思いました。

十六歳の弟の悩みの遠因としてわれはあり夏雲の階

澤村斉美「夏雲」

今の若い人の歌です。弟は十六歳で何か悩んでいるのでしょうか。直接その悩みに自分は関係ないけれど、遠因としてはある、というんですね。「遠因としてわれはあり」なんて、何か哲学的な命題みたいでおもしろい。弟にとつて姉ってたしかに何らかの支配を及ぼしている存在なのかもしれません。その加害者意識が理智的にとらえられていると思うのです。

一首の内容は「われはあり」までで終わって、結句七音が残っています。そこに「夏雲の階」と付けたんですね。こういう付け方は今は珍しくないのですが、従来の短歌には無かった方法です。上がかなり理智的ですから、この結句でぱつと抒情的になって、なかなか成功しているんじゃないでしょうか。真つ白な夏雲の階を、弟よのほつていけ、というエールの感じもします。

鈴を産むひばりが逃げたとねえさんが云ふでも
それでいいよねと云ふ

光森裕樹「鈴を産むひばり」

もう一首、若い世代の歌を二〇一〇年に出た歌集から引きます。「鈴を産むひばり」って何でしょうね。わかりません。とにかく、それが「逃げた」と言い、「それでいいよね」と言うのも、ねえさん一人です。

この「ねえさん」じたい居るのでしょうか。こんなふうには、ひとりで勝手に何か居ると思ったり、居なくてもいいと思ったりする存在が「ねえさん」のイメージなのでしょうか。ふしぎな歌ですが、この句またがりの妙な韻律で引き込まれる歌です。

あまり例が見当たらなかったのですが、老いてからの兄弟姉妹の歌もいいのではと思います。病氣や亡くなったときの歌が多いのですが、日常での交流や齟齬、回想など詠んでみたらどうでしょうか。



選者の一首

花山多佳子

いさかひの声よりさびし弟と姉の口笛とほ
くに揃ふ

「空合」

私は一人っ子で育ったので、兄弟げんかの経験がありません。二歳ちがいの子どもたちのいさかひの激しさには魂消るのみ。でも、あるときは仲良くいっしょに口笛を吹いていたりします。その口笛がきれいに揃って、なにかさびしく聞こえました。

放送・4月15日(日)

再放送・4月17日(火)

日常の歌と時代 お金

日常生活でお金は欠かせないものです。誰でも関心は大いにあるはずですが、短歌でどう詠み込めか難しいですね。忘れていたことでもありますが、現実との関わりということを考えて、もっと意識していいテーマだと思います。

近代短歌はロマン主義の「明星」時代のあと、自然主義時代に移り、実生活に密着した短歌が主流となりました。大方は貧しさの中で、銭や金という現実的な物も、歌に登場するようになってきます。

その先がけは何といつても石川啄木です。はじめ明星風の巧緻なロマン派の歌をつくっていた啄木は、一転して、日常の自己を見つめた平明な歌をつくるようになります。

わが抱く思想はすべて／金なきに因すること
し／秋の風吹く

石川啄木「二握の砂」

明治四十三(一九一〇)年作の歌。自分の胸に抱く思

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者

Takako Hanayama

想というのはみな、結局は金がないことから来てるようだが、秋の風が吹くなあ、ということですね。これは鋭い認識です。思想というと頭の中の高尚なことのようになりがちですが、置かれた生活状況に左右されている。そのことを実感としてつかんで、さらりと言つてのけています。「秋の風吹く」と収めるのは啄木のよく使うパターンですが、うまく嵌っています。ああ、わびしいなあ、という感じですね。

啄木には「金」の歌が、数えたら六首ありました。金を借りる歌、金を欲する歌、どれも率直で、これがまだ明治かと驚く新しさがあります。

樋口一葉またの名を夏 まつすぐに草矢飛ぶごと金借りにゆく

川野里子「太陽の壺」

これは現代の歌ですが、同じ明治期の樋口一葉をうたっているのと並べてみました。一葉は啄木より十四年早い生まれです。



一葉の本名は奈津ですが自分では「夏」「なつ」と書いていました。「夏」と書いた心の強さが「またの名を夏」の口調に出ている、それが「まつすぐに草矢飛ぶごと」につながっています。恋人のところにも飛んでいきそうですが「金借りにゆく」んですね。啄木もずいぶん金を借りにいきましたが、一葉も貧困からお金の工面に向かっています。男性とは違った決意と勇気があったでしょう。この歌では借金に「まつすぐに草矢飛ぶごと」と、みずみずしい表現をしたのがユニークです。一途に生きて書くために金を求めにいく健やかさ。作者はそれを感じて、こういう表現をとったわけです。作者の解りなのですが、潑刺とした一葉像を提起しています。



イラスト：竹嶋浩二

ただひとり吾より貧しき友なりき金のことにて
交絶まじりたてり
土屋文明『往還集』

大正十三（一九二四）年作の歌です。自分より貧しいのはその友だけだった。その友と金のことで絶交してしまった。感傷を交えず「なりき」「絶てり」という断定調に、かえって強く伝わってくるものがあります。共感、友情といったきれいなことではなくて、貧しさゆえのシビアナ関係、心理がリアルに暴かれています。

この歌の内容だけで一篇の私小説が書けそうですね。文明は大正のはじめごろは小説を志していたので、短歌にも小説的な傾向が見られます。

いさぎよく金を使ひて行くときに雲が軌条を描く夏空
三國玲子『花前線』

昭和三十年代に三十年代だった作者の歌です。「いさぎよく」と言っても、たいしたことはないでしょう。逆に、ふだんの儉つましさがここに覗いているという感じですね。ちよつと背伸びする思いで買物。「雲が軌条を描く」というのは飛行機雲でしょうか。「軌条」と固い漢語を使っているが目立ちますが、戦後はこうした漢語がよく使われました。レールのように延びる雲は、高度成長期で「いさぎよく」お金を使える気分と重なっているようです。この時期も豊かではないのですが、時代が消費を

うながす空気というものを、この歌に感じるので。

洋裁で生計を立てていた三國玲子の第一歌集『空を指す枝』には貧しい青春が清新に歌われています。「失くしたる錢埋め合す仕事してさびしき夜更犬を呼びたり」なども、情感のあるいい歌だと思います。

このごろは鳩がたつとき大いなる紙幣の束をばらす音する
黒木三千代「クウエート」

鳩がいつせいに飛び立つ羽音はすごいですね。それを「紙幣の束をばらす音」だというのがまたすごい喩えです。昔はそう聞こえなかったが「このごろは」なんですね。この歌がつくられたのは平成の初めで、バブルが崩壊した時期にあたります。紙幣が空にばらけていく、そういう時事の歌と読んでいいのでしょうか。戦後、鳩といえば平和の象徴だったのに、ここでは紙幣。そんなシニカルな目も感じます。「クウエート」は当時の湾岸戦争や時代状況を、比喩を駆使して表現した歌集です。この歌も意図が明確なのですが、とても生々しくて、鳩が飛び立つたびに思い出してしまいます。

レシートへ硬貨を載せる 客の掌にわれの冷たき掌が触れぬよう
沼尻つた子「歌壇」2012・2

今年発表された「歌壇賞」の次席の歌から引いてみました。コンビニで働く日々を歌った一連の中の歌です。

お釣りは「レシートへ硬貨を載せる」ように、というマニュアルもあるのでしょうか。そこに「われの冷たき掌」を差し挟んで「われ」の身体に引き寄せているのが、この歌の良さです。レシートの上の「硬貨」は流通する物として、効果的に機能しています。こういう、ちょっとした場面に、繊細な意識を行き渡らせるのが、現代の若い人なのでしょう。

お金を詠んでみると、おのずと人間の心理や、時代が見えてくるかもしれませぬ。ぜひ試みてください。

選者の一首

花山多佳子

金なきを嘆きて言へば『公募生活』買ひ来し娘に凭りゆくころ
「木香薔薇」

『公募生活』というのは小説の新人賞などの公募要項一覧雑誌です。娘がそれを買ってきて熱心に見ている。応募して賞金を取ろうというわけです。ばかばかしい、と思いつながら、かすかに当てにするような心持ちになって、という歌。挑戦した娘はあえなく砕け、図書券一枚もらいました。

放送・5月13日(日)
再放送・5月15日(火)日常の歌と時代
気象

気象、つまりお天気ですね。これは日常の気分が大いに影響します。気分だけでなく身体にも多かれ少なかれ影響があります。湿気とか風の吹き方とか、微妙にその日その日の調子に関係しています。花粉症の人や病もつ人は微妙どころでなく、でしょうね。

短歌では季節や叙景とセットで気象はよく取り入れられています。ここでは気象が一首のメインである歌をとりあげてみました。天気のことだけでもりっぱに歌になります、という参考例です。

霜月の冬とふ此のころただくも只曇り今日もくもれり思おも
ふこと多し
伊藤左千夫『左千夫歌集』

明治四十四(一九一一)年作の歌。「只曇り今日もくもれり」とただただ曇っていることをうたって、「思ふこと多し」と最後にぼつと言っています。それだけなので、妙に印象に残ります。「霜月の冬とふ此のころ」なんて、ふつう言わないですね。「霜月の此のころ」で十分

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama



な感じ。ここは、せつかちな運びにならないように、意味はなく調子を整えているのでしょう。左千夫の歌は言葉を重ねていつて重層的なのが特徴。その結果、取り立てた内容がなくても一首になっています。

この歌は「冬のくもり」と題する連作の一首目。事柄は何もなく、ひたすら曇りと叙景です。そこに、鬱々として晴れない心境が伝わってきます。「思ふこと多し」の中には、始まりかけていた斎藤茂吉や島木赤彦との対立もあつたかもしれせん。

昼すぎの不吉なる春の曇日くもりびに約束ありて家いで
て行く
佐藤佐太郎『帰潮』

これもまた曇り。佐太郎にはやたら曇りの歌があります。「不吉なる」って唐突ですね。何が不吉なんだか読者には不明です。たぶん、この約束に気乗りがしてなくて、出ていくのが億劫なのでしょう。そういう心理が働いて「不吉なる春の曇日」と言ってしまった、と

いう感じですが。「約束ありて」を先に言ってしまうと、つまらない。逆だから、自分でも把握できない無意識が滲み出た表現になっているといえます。漠然とした不安ですね。「春の曇日」という天気がぴったりです。

この歌は昭和二十二（一九四七）年作。『帰潮』は戦後の混乱期の貧困の中でのとりとめない不安がただよう歌集です。

子の旋毛のやうだと思ひもう一度細線にかへて
台風を描く

真中朋久『雨裂』

明日は雨と書きいだしつつ概況は恋文のやうに
滞りをり



イラスト：竹嶋浩二

この二首は気象予報士である作者の歌なので、一般の天気之歌とは一味ちがいます。一首目は、一度描いた台風の図を見て、ふとわが子の旋毛つむじのやうだと思っただんですね。そう思いながら、また描く。「細線にかへて」というのが、なかなかいいですね。すでに台風より、子のやわらかな細い旋毛を描いている気分。その感じがさりげなく伝わります。

二首目も、気象予報の文面を書き始めて書き泥なすんでいるところ。「明日は雨」になるでしょうか、などと恋文の書きだしのよな感じだとふと思つて手が止まる。確かに手紙の書き出しは、たいいてい気象です。それも「明日」なんて、約束でもあるようですね。

二首とも職業の歌なのですが、気象というのは情緒のあるものですから、事務的にはいかない。そのあたりのたゆたいが繊細に出ています。

『雨裂』は平成十三（二〇〇一）年出版の歌集です。

あをぞらが山の向かうから現れて気を許すなよ
と拡がりてくる

河野裕子『母系』

「あをぞら」を主語とした擬人法というのは、とてもめずらしいですね。山の向こうから晴れてきて、青空がだんだんに拡がりてくる。ふつうなら何て美しい、と見とれるところ。それが「気を許すなよ」と拡がりてくるのですから怖い。「気を許すなよ」はむろん作者の心

の声ですが、それを青空に言わたところに、異様なインパクトが生まれています。

作者は五年前に発症した乳癌の再発をいつも怖れています。それがこういう表現になっているのですが、その背景を知らなくても理解できる歌だと思います。青空というのは、どこか残酷な美しきで迫ってくることは、おうおうにしてあるものです。

この歌は平成十七(二〇〇五)年作ですが、三年後にこの怖れは現実になってしまいました。

日記には必ず天気を書くような子供でありしわれのための空
後藤由紀恵「冷えゆく耳」

天気を書けという宿題もありますが、これは自ら必ず書くタイプの子供だったので、書く決めていると天気を意識します。書くために天気があるような。それが「われのための空」ではないでしょうか。あのころ空はわれの日記のためにあった、と。これは自分の一つの発見ですね。また、短歌でも思いあたることで「はじめに言葉ありき」というところでしょう。

日記に必ず天気を書くというので、思い出すのは永井荷風の日記「断腸亭日乗」です。その中で、こういう記述があります。昭和七(一九三二)年、ラジオを聞いて「放送局員の天気予報をなすに、北東の風あるいは南東の風あるいは愚図ツイタ天気などいふ語を用ゆ。こ

れ頗る奇怪なり。：グズツイタ天気といふは如何なる意なりや。愚図々々してゐるといふ語はあれど、愚図ついでゐるといふ事はかつて聞かざるところなり。：いかにも下品にて悪しき俗語なり。」「ぐずついた天気」と今はふつうに言いますが、荷風は許せなかつたようです。

気象用語や表現はすぐに流通します。「熱帯夜」「真夏日」「猛暑」「桜前線」「春一番」などが、当たり前のように一般の人の短歌に出てきます。便利ですが、安直に使うのは避けてほしいと思います。

選者の一首

花山多佳子

青嵐ふく夕まぐれ路地の口より鮫のあたま
が出かかつてゐる
「春疾風」

「青嵐」は青葉のころ吹く強い風です。どこもかしこも青葉がはげしく怒濤のように揺れています。細い路地を出かかっているのは車ですが、路地いっぱい幅であたまを出したのを、「鮫」と感覚的に言った歌です。ちよつとシユールでしょう。

放送・6月10日(日)
再放送・6月12日(火)

日常の歌と時代 お風呂

お湯につかるというのは、一日のもっともほっとする時間。日常には欠かせない至福の時間であり、また日本の一つの生活文化でもあります。文化という点では、温泉が歌人にも一般の人にも、大いに詠まれています。ここでは、日常のお風呂に限定して取り上げてみたいと思います。

色硝子暮れてなまめく町の湯の窓の下なるどくだみの花

北原白秋「桐の花」

内風呂がほとんどの家につくようになったのは、いつ頃からでしょう。都会では戦後までずっと銭湯が主だったようです。私も好きでよく行きました。夢にたまたま銭湯が出てきます。

この歌は明治から大正にかけての東京の銭湯風景です。「色硝子」が町の湯の窓に嵌っていたのでしょうか。色タイル貼りはおなじみですが、これはびっくりです。「桐の花」はハイカラ情緒の歌集なので「色硝子」を配し

はなやまたかこ
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama

たとも読めなくはないですが、たぶん実際でしょう。そして、窓の下には「どくだみの花」。こういう取り合わせが白秋のセンスですね。いかにも、まだ田舎の東京が「色硝子」によって一層わびしく、哀感をそそります。

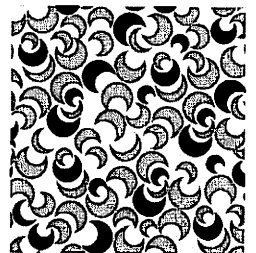
銭入にただひとつありし白銅貨てのひらに載せ朝湯にゆくも

古泉千樫「青牛集」

日曜の昼の湯に居りかよわかるわが娘のからだしみじみ見るも

同

大正七(一九一八)年の歌。古泉千樫はお風呂好きらしく、銭湯や温泉の歌がかなりあります。一首目、ただ一つある白銅貨をもって朝湯に行っちゃうんですね。「持ちて」でなく「てのひらに載せ」というところに味があります。まず載せて眺めて、どうするかなあ、と一瞬思った。それで、ままよ、朝湯に行くか、となったのかもかもしれません。その心理までは言わないで、のどかな感じさえしてしまうのが千樫の歌です。



二首目、こんどは昼の銭湯にいます。幼子二人を日曜の湯に入れて三十代の父親です。「かよわかる」は、かよわくある、ということ。歌集の少し前には病気の子を案ずる歌が出てくるので、この子がそうでしょう。千櫨はこの数年前にやはり女の子を亡くしています。銭湯であらためて子のよわよわしい身体に胸を突かれて見ている。父親でも千櫨の歌は身近に子に寄り添う情愛がこもっています。

裸にてわれは持ちたり紅の林檎もちたり朝風呂のなかに

岡本かの子『浴身』

これはまた大胆な歌。さすが岡本太郎の母ですね。



イラスト：竹嶋浩二

「朝風呂」だから朝光が差しこんでいるのかもしれない。裸で林檎を持っている図は異様ですが、当時見るようになった裸婦像などのモデルの気分ではないでしょうか。林檎は明治期に入ってきて、まだ新鮮な果物だったでしょう。デッサンの格好なモチーフですし、聖書にも登場する象徴的な果物でもあります。

大正十二、三年ごろの歌で、かの子は三十代半ば。ナルシズムが匂う歌ですが、一方で絵画となり切ったような斬新さがあります。それにしても西欧絵画ふうなのに「朝風呂」とは、妙に日本的になってグサイ感じ。そんなところも、かの子らしくて面白い。実際に朝風呂によく入っていたようです。お屋敷なので、これは内風呂でしょう。銭湯ではできませんね。

滝戸山頭の上から月が出て五右衛門風呂をいっばいにする

山崎方代『こおろぎ』

「滝戸山」は方代の故郷、山梨県の右左口うひだぐち近くの山。五右衛門風呂はあったのでしようが、回想の歌というよりはイメージの歌でしょう。「頭の上から月が出て」が、いかにも方代さんらしい、ちょっとシユールな感じ。 「いっばいにする」は月の光をいっばいにするということでしょうね。ちょうど滝戸山の真上に月がきたとき、お湯を充たすように月光が五右衛門風呂を充たす。何か安らかな恩寵のような世界です。鑄物の黒々

とした五右衛門風呂であるゆえに生きるイメージで「滝戸山」という地名とよく照応しています。

『「おろぎ」は昭和五十五（一九八〇）年に出ています。歌はそれよりだいぶ前の制作かもしれません。

ほのかにもからだにまとふ秋雨の音もろともに湯船に入りぬ
西村美佐子「風の風船」

「ほのかにもからだにまとふ」は「秋雨の音」までかかります。「秋雨の音」を身体にまとっている。音をまとう、という感覚がユニークで、その音とともに湯船に入った、というのもまた珍しいように思います。めずらしいのですが、ごく自然にさらっと読めてしまいます。流れるようなやわらかい調べで、その日の秋雨が湯船に降るよう。このとき体の重みとか嵩張りが消えていく安らぎが感じられます。「秋雨」が良くて「春雨」ではだめですね。「湯船」という言葉も効いています。

『風の風船』は平成三（一九九一）年出版ですが、この年はなぜか「風」のつくタイトルの歌集が多く出たのでした。

浴槽は海に繋がっていません だけどいちばん夜明けに近い
馬場めぐみ「短歌研究」2011・9

昨年の短歌研究新人賞受賞作の中の歌で、選考座談会でわからないと論議を呼んでいました。私もわかり

ません。上は空間で、下は時間ですね。空間的にどこにも繋がっていないけれど、夜明けには最も近く思える、と単純に読んでみました。「浴槽は海に繋がる」という発想はむしろありそうです。それを否定することで閉塞感が際立って、「だけど」が切実にひびきます。湯に浸かっているとき、人はさまざまな感慨にふけつたり、自分を励ましたりします。この歌も二十代の作者の自分へのエールなのだと思います。



選者の一首

花山多佳子

たまさかに一人の湯より上がり来て枇杷の実ひかる卓に寄りゆく
『砂鉄の光』

二人の子が小さいころは、いつもお風呂がいつしよで、たまに一人で入ると、のびのびしてうれしかったものです。その湯上りの気分、テーブルの上の枇杷の実が光っている。そこに近づいていく、ささやかな幸をうたいました。

放送・7月8日(日)

再放送・7月10日(火)

日常の歌と時代 電気

昨年の東日本大震災以来、電気・電力というものに関心が高まりました。日常にかくも関わっているのに、ふだん私たちは電気を意識することは、あまりありません。でも、灯りや家電製品や電話や、風景としての電柱、送電塔などは、ずいぶん歌にも登場します。それぞれ興味深いのですが、ここでは少し絞ってみます。電気というものを意識にのぼらせた歌を拾ってみましよう。

秋近し！／電燈の球のぬくもりの／さはれば指の皮膚に親しき。

石川啄木「悲しき玩具」

「電燈の球」も啄木がいち早く歌っています。あとと見ても、電球の歌はめずらしく斬新です。そのぬくもりの親しさから「秋近し」と思う。これは新時代の季節感といえます。「指に親しき」でなく「指の皮膚に」というところが鋭敏な感覚です。電球のぬくもりは電気熱なので、自然のぬくもりではありません。皮膚の

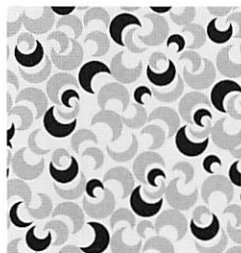
はなやまたか
花山多佳子「塔」選者
Takako Hanayama

違和感、刺激をとらえつつ、あえて「親しき」というのですね。明治四十四(一九一一年)のこのとき、啄木にはもう死期が迫っていたのでした。

電燈の中に吊してたゞ二人団欒といふに似たる事する

尾上柴舟「日記の端より」

『日記の端より』は大正二(一九一三年)刊なので、ほぼ同時期の歌です。当時「一家団欒」という言葉は「家庭」「ホーム」という言葉とともに、新時代の幸福の象徴として標榜されていたようです。「団欒といふに似たる事する」と言ったのは、団欒の賑やかさはなくて「ただ二人」だからでしょう。柴舟夫婦に子供はいませんでした。そのさびしさが覗く歌です。ここで新時代の「電燈を吊して」が効いています。都会の家庭の団欒を照らす電燈をセットする。だから団欒に似たことをする。そこには、ちよつと面映いような感じがあるのではないでしょうか。当節はやりの「だんらん」でなく「ま



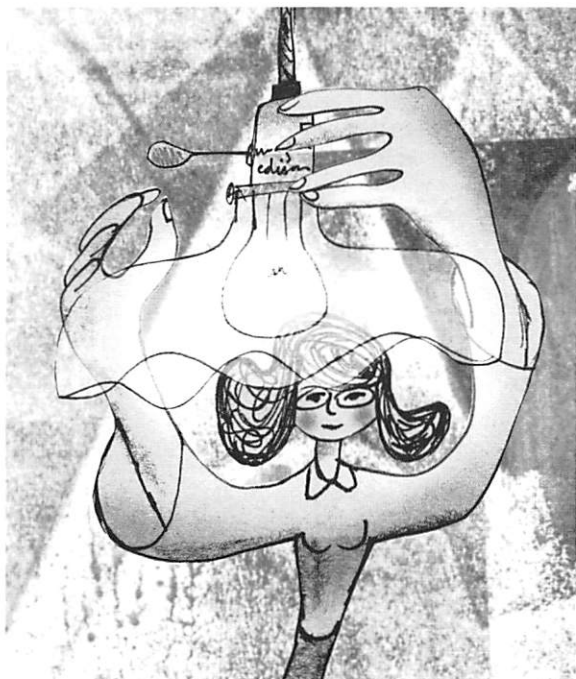
とる」と古語のふりがなをつけているところ、「といふに」の婉曲に、そんな心理の機微を感じます。

花のやうにバラツクの町に灯がともり今宵あた
たかき冬の雨ふる

大野誠夫「薔薇祭」

この灯は電燈でしょうね。焼け跡のバラックに電燈がともったのはいつ頃なのか、終戦後すぐではないでしょう。「花のやうに」とはずいぶん甘やかですが、ここに敗戦後の涙ぐましい思いがあります。バラックから洩れる明かりは低く咲く花のように美しかった。雨もあたたかく町を包むように降っています。

『薔薇祭』は昭和二十(一九四五)年から二十三年の戦



イラスト：竹嶋浩二

後の東京を哀しい情感で写しとっている歌集です。

風の夜の黒きコードを洩れてゐるひりひりと小
さき電流ありき

葛原妙子「薔薇窓」

ここでは電流という目に見えないものが登場しています。実際に洩れていたらいへん。でもコードが傷ついて、洩れてるかも、と思うことはありますね。そんな日常の一コマを「ひりひりと小さき電流ありき」と断定的に言い放つことで異様なインパクトが生じました。「風の夜の」という出だしが、洩れる小さな電流とスパークして効果をあげています。

目には見えないものが存在している、洩れている、葛原妙子の関心はそこに向いています。その危うさ、おそれが「ひりひりと」感じられます。

昭和三十年ころの歌で、電気も意識されはじめた感があります。

電流を絶たれ、はじめてみづからの聲なき唄う
たふ電気ギター

塚本邦雄「日本人靈歌」

これも昭和三十一(一九五六)年から三十三年あたりの歌。いわゆるエレキギターが日本に広まったのは昭和四十年代、ビートルズ来日後かと思うので、ここでも「電気ギター」が出てくるのはびっくりです。電流を絶たれた電気ギターに音はないわけですが、そこで初め

て自分の唄をうたう、というのですね。一首全体が比喩になっているわけで、たとえば占領された日本を重ねることもできるし、普遍的にも読めるでしょう。

塚本邦雄にしてはわかりやすい歌です。しかし、高度成長期が始まったところで、その後の日本の人々が電流を流し続けられたギターのようになっていたことを思うと、暗示的でもあります。

ことごとく窓を閉ぢたり電線をのみふかぶかと
みちびき入れぬ
小池 光「草の庭」

「家」と題する歌で主語は「家」です。ふつう一首に主語がないと「われ」を主語と考えて、われが窓を閉じて電線をみちびき入れた、と読みます。この歌は違うつくりになっています。現代の家は、窓をみな閉めて、電線だけを中に深く入れている。

たしかにそうですね。昔は窓や戸も開けつばなしで、人もよく出入りしました。今は閉め切ってクーラーつけてテレビ見て電器製品だけと暮らしています。「ふかぶかとみちびき」という表現に、その妙な、怖い感じが醸されています。外界から遮断された、電気とのみのお付き合い。『草の庭』は平成七（一九九五）年刊です。

戦後のバラックの灯の涙ぐましさと隔世の感があります。でもこのたびの大震災では電気が絶たれ、蠟燭が照らすことになりました。

真昼間の睡魔は来たり電飾の垂れ下がりを並
木伝ひに
石川美南「離れ島」

昨年出版された若い人の歌集より。昼間の電飾は消えて垂れています。「こずゑまで電飾されて街路樹あり人のいとなみは木を眠らせぬ」（小池 光）という歌もあります。昼の木の眠気に作者も吸い込まれていくような。「並木伝ひに」がその感覚を巧みに伝えてきます。



選者の一首

花山多佳子

電飾を巻かるる公孫樹のかたはらにほしさま恣なる
桜木のうねり

「胡瓜草」

電飾を巻かれるのは真直ぐに立った形の良い木ですね。すらっとした公孫樹のすぐ横で、桜が枝を広げて、大いに幹をくねらせている。こういう木は電飾されないなあ、と思いました。なんか人間にも当てはまるような。

